

高校生英語学習者の語彙学習方略使用と学習成果

前田 啓朗* 田頭 憲二** 三浦 宏昭***

本研究では、日本の高校生英語学習者による語彙学習方略(以下VLS)の使用に焦点を当て、VLS使用の一般的傾向と異なる学習成果の段階における傾向を明らかにすること、簡便にVLS使用を測定できる質問紙を提供すること、英語学習をより促進できるようなVLS指導への示唆を導くこと、を目的とした。先行研究で示された高校生英語学習者のVLSを用いて調査を行い、15高等学校からの1,177の回答を分析し、先行研究に示される「体制化方略」「反復方略」「イメージ化方略」の3因子を仮定するモデルが確認された。同時に学習成果を測定し、上位・中位・下位に分割して分析を行った結果、VLS使用の強さが上位・中位はあまり異ならないがそれら2群と下位では顕著に異なり、異なるVLS間の相関は中位と下位ではあまり相違ない一方で上位ではイメージ化方略と他の2方略が比較的独立している、という結果が得られた。このことから、VLS指導や語彙指導の際に、学習成果の度合いに応じて効果的なVLSは異なるという点に留意する必要性が示唆された。

キーワード：語彙学習方略，高校生英語学習者，学習成果

問 題

現在まで語彙学習方略(VLS: Vocabulary Learning Strategy)に関して多くの研究がなされている。これらのVLS研究は大きく以下の3つの研究分野に分類することができる。第1に、学習者が使用するVLSのそれぞれをどのような範疇にまとめることができるのかという、VLSの分類に関する研究(e.g., Natron, 1990; Cohen, 1990)。第2に、複数のVLSを実際に学習者に指導することで、どの方略がより最も有効であるのかを検証する、VLSの指導効果の比較研究(e.g., Rodriguez & Sadoski, 2000, 姉崎, 2000; 三浦, 2002)。そして第3に、学習者がどのような方略を使用しているのかを調査する、VLS使用の調査研究(e.g., Gu & Johnson, 1996; Schmitt, 1997)である。しかし、従来の研究は、上記のうち第1と第2の分野に関するものがほとんどであり、第3の分野における学習者の実際のVLS使用に焦点を当て調査を行った研究は少ない。そのため、学習者の実際のVLS使用に関してはほとんど明らかになっていないのが現状である(Kojic-Sabo & Lightbown,

1999)。先行研究にはそのうえ、日本の高校生英語学習者とは背景が大きく異なる文脈でなされたものも多い。そこで、本研究においては、特にこの第3の分野に焦点を当て、日本の高校生英語学習者が実際に使用するVLSを学習成果の観点から調査、分析を行う。

海外の第2言語学習者を対象としたVLS研究

Sanaoui (1995) は、ESL (English as a Second Language) および FSL (French as a Second Language) 学習者を対象に VLS 使用を調査した。この研究では、ESL 学習者 50 人を対象とした 6 週間にわたる調査と、ESL 学習者 4 人と FSL 学習者 8 人を対象とした 6 週間にわたるケーススタディの 2 種類の長期的な調査がなされている。その結果、学習者の語彙学習への態度は、組織的なアプローチと非組織的なアプローチで取り進む 2 つのタイプに区分された。また、その後の実験において組織的なアプローチが語彙学習に良い成果をもたらしたことが報告されるとともに、VLS が語彙学習成果を決定付ける重要な要因であるとしている。同様に Kojic-Sabo & Lightbown (1999) でも、学習者による積極的な VLS の使用が語彙学習を促進するとされている。

また、Lawson & Hogben (1996) では、最低 5 年間のイタリア語学習経験を持つ 15 人の大学生を対象に調査を行った。調査は think aloud 方式で行われ、被調査者が 12 のイタリア単語を学習するとき使用する VLS を「反復」「語形分析」「単純精緻化」「複雑精緻化」の 4 つの範疇に分類した。その結果、学習成果の高い

* 広島大学情報メディア教育研究センター外国語教育研究系
〒739-8521 東広島市西条町鏡山1-7-1
keiroh@hiroshima-u.ac.jp

** 広島県立広島皆実高等学校 〒734-0001
広島県広島市南区出汐2-4-76
k.tagashirak865527@hiroshima-c.ed.jp

*** 大分県立大分上野丘高等学校 〒870-0835
大分県大分市上野丘2-10-1 mhiroaki0120@hotmail.com

学習者は幅広い方略を使用し、その中でも反復方略を頻繁に使用していたと報告している。しかし、この調査は比較的学習成果の高い学習者のみが対象であったため、異なる段階の学習者に対してどのような示唆を示すことができるのかは明らかではない。

日本の英語学習者を対象とした VLS 研究

Schmitt (1997) は、Oxford (1990) の学習方略の分類表を参考に VLS の分類表を作成し、学習者がそれらの VLS を実際に使用する程度と、有効だと思ふ VLS について、学習者の発達段階の観点から調査を行っている。被調査者は日本人英語学習者の 4 群 (中学生、高校生、大学生、大人、各 150 名) である。調査の結果、被調査者の使用する VLS は各群により異なり、VLS の使用度は発達過程に応じて変容することが指摘されている。しかし、Oxford (1990) による分類を日本の高校生英語学習者に適用することには問題が指摘されており (eg 前田・大和, 2000)、被調査者の認知的成熟度と学習成果のどちらの要因により使用傾向が変容したのかは明らかではない。また、Schmitt (2000) においては VLS 使用に影響を与える要因として、学習成果、学習者の母語と文化、動機づけ、目標言語学習の目標、タスクと教材、そして目標言語の 5 点が挙げられている。

日本人中学生を対象とした VLS 使用の調査研究として、中学 3 年生 99 名を被調査者とした姉崎 (1999) が挙げられる。アンケートに用いる VLS としては、Gu & Johnson (1996) から 40 項目、北條 (1997) から 2 項目、独自の 7 項目を加えた、合計 49 項目が用いられている。それらは分析の結果、「類似性着目」「反復練習」「文中暗記」「学習順序決定」の 4 つの概念としてまとめられている。しかし方略として構成概念をまとめただけで、それらの相互関係や使用の頻度等については指摘されておらず、習熟度の違いによる傾向の相違について言及されていないことも問題点として挙げられる。

また、堀野・市川 (1997) では日本の高校生を対象にして、学習者が実際に使用する語彙学習方略に焦点が当てられた。まず、自由記述による調査 ($N=160$) で学習者の VLS を抽出し、KJ 法による項目の分類によって 23 項目からなる質問紙が作成された。その後、予備調査 ($N=250$) による尺度構成によって項目数が 17 項目に絞られた。本調査においてはこの 17 項目を用い、学習動機、学習者の使用する VLS、学習成果の関係が調査された ($N=321$)。高校生英語学習者の自由記述から汲み取った質問項目とその分類、予備調査による尺度の検討、などを経た綿密な手順による研究である。

この研究では VLS は「体制化方略」「反復方略」「イメージ化方略」の 3 つに区分されている。体制化方略とは「同意語、類義語、反意語をピックアップして、まとめて覚える」に代表される、英単語を意味的・概念的・機能的・場面的な観点に基づく類似点や相違点に従って体制化しようとする VLS である。反復方略とは、「英語から日本語、日本語から英語へと何度も書き換える」に代表される、音韻的・書字的な繰り返いを重視するものである。そしてイメージ化方略とは、「単語をながめながらアルファベットの配列の雰囲気をつかむ」に代表される、書字的な要素を通じて単語のイメージやニュアンスをつかもうとするものである。分析の結果、これら 3 つの VLS のうち、体制化方略のみが学習成果に有意に影響を及ぼすとされている。

日本の高校生英語学習者を対象にした検討

VLS 使用への積極性と学習成果との正の相関性は、海外・日本国内を問わず主張されている。それらの関係は逐次的な因果関係というよりもむしろ、久保 (1999) における「志向-評価モデル」のように循環的に相互に影響しあう関係であると考えられる。本研究ではこの見地を基盤とする。

また、海外の研究成果として挙げた Lawson & Hogben (1996) による反復方略などのように、日本においても中学生を対象にした姉崎 (1999) や高校生を対象にした堀野・市川 (1997) においても同様に概念化される方略もある。しかし、海外における VLS 研究の成果を考慮する場合、第 2 言語学習においては母語や目標言語の影響が十分に考えられる (Schmitt, 2000) ため、それらの概念がそのまま日本の英語学習者においても同様であるとするのは難しい。

また、応用言語学やそれを基盤とする英語教育学の研究における日本の VLS 研究については、海外の研究成果に基づく傾向が見られる。このことは、上述の母語や目標言語といった学習者要因を考慮した場合、疑いが残る。そして、先行する研究成果を応用することによって、学習者の実態をボトムアップ的にすくいあげるといふ観点に欠ける危険性も存在する。

これらの問題点を解決したものが、堀野・市川 (1997) であると考えられる。日本の高校生英語学習者を対象とし、先行研究の理論的枠組みを用いながらも VLS に関する自由記述回答からボトムアップ的に実際に使用される VLS が浮き彫りにされ、予備調査から本調査を経て尺度の検討もされている。すなわち、日本の高校生英語学習者を対象として実状を基盤に行われた先行研究としては、最も信頼できる結果のひとつであ

ると考えられる。

しかし、被調査者をひとまとめとして結果が示されていることから、様々な学習成果における高校生英語学習者集団に対する個々の対応は導きにくい。また、ある高等学校の生徒のみを対象としていることと、被調査者の英語の学習成果が一般的な高校生英語学習者全体の中でどのような位置にあるのか不明であることから、結果の一般化や応用が困難である。さらに、モデルのデータへの適合を検討するという観点から分析方法において改善できる点 (eg. 前田・大和, 2000; 前田, 2000) も挙げられる。

目 的

日本における VLS 使用の調査研究では、被調査者の設定方法と規模が不十分であるために一般的な傾向が導かれないこと、被調査者の英語熟達度による方略使用傾向の違いが不明であること、という問題点が挙げられた。そこで、本研究においては可能な限り様々な学校から被調査者を得て、被調査者が修めている学習成果の観点から分析を行うことによって、先行研究の問題点の克服を試みる。

大規模な調査を行うことにより、日本の高校生英語学習者を対象に、

- 目的 1) VLS 使用について、一般的傾向をできるだけ高い信頼性で明らかにすること
- 目的 2) VLS 使用について、異なる学習成果の段階における傾向を明らかにすること
- 目的 3) 教育場面で簡便に VLS 使用を測定するための質問紙を提供すること
- 目的 4) 英語学習をより促進できるような VLS 指導への示唆を導き、資料を提示すること

という 4 点を目的として調査が計画された。これらの目的を達成するために、先述のように日本の高校生を対象にした VLS 研究であり、一部を残すものの多くの課題を克服している堀野・市川 (1997) を基盤とした。

方 法

被調査者

個人的に依頼を行った結果 15 高等学校の協力を得ることができ、2000 年 2 月から 3 月にかけて調査が実施された。得られた回答のうち、大きく記入漏れがあるものなどを除いた 1,177 回答が有効な回答として扱われた。

VLS 調査の材料

VLS の測定には堀野・市川 (1997) にて示された 17 項目 (FIGURE 1) が用いられた。回答方法については、堀野・市川 (1997) に示されるものは「非常によく使用している」等として頻度を 7 件法で尋ねるものである。本研究でも同様に 7 件法としたが、調査の実施都合上、同時に他の質問紙を用いたため、被調査者の混乱を避ける目的で他の質問紙にあわせて「7. 非常にあてはまる」から「6. よくあてはまる」「5. ときどきあてはまる」「4. どちらでもない」「3. あまりあてはまらない」「2. ほとんどあてはまらない」そして「1. まったくあてはまらない」として、適合度を尋ねた。

学習成果測定の方法

前田 (2001, 2002a, 2002b) に示される、制限時間を 5 分とした C-test (64 問, 64 点満点) が使用され、その結果が学習成果の指標として用いられた。英語の学習成果を測定するためには様々な観点からの観測変数を準備することが望ましいが、総合的英語熟達度の指標として適用できると主張され、比較的短時間で多くの設問に取り組むことができるこの形式が実施容易性の観点から採用された。このテスト形式は、文章中の一語おきの単語の後半部分を空欄とし、それらの語を完成させるものである。授業時間を割いて実施するため、これ以上の時間を要するテストは不可能であると思われた。

分析の手続き

まず被調査者全体を対象とし、目的 1) に従って基礎資料を提示するために、回答傾向を度数分布に集計した。その後、検証的因子分析を用いて堀野・市川 (1997) と同様の因子構造が得られることを確認した。

次に、目的 2) を達成して様々な教育実践の場において有用な結果を示すために、学習成果に応じた分析結果を示すことを試みた。本調査では多くの被調査者を得たために、学習成果に大きなばらつきがあることも理由である。一般的には中程度かそれより高いまたは低い学習成果という見方をすることが多いことから、C-test の結果を基に上位・中位・下位の 3 グループに分割した。これを基に、様々な制約を科して平均構造を用いた多母集団の同時分析を行った。

そして、目的 3) を満たすため、質問項目の精選を試みた。表面的妥当性と実施容易性を考慮して各因子の指標となる観測変数の数を削除して同じとし、かつ、モデルの適合を検証した。多母集団の同時分析におけるモデルの検討については狩野・三浦 (2002) および山

森(2002), 因子の平均を用いるにあたっては豊田(1998)が参考にされた。

結 果

全体的傾向

各質問項目に対する被調査者全体の回答は, 百分率を用いた度数分布の形式でTABLE 1 に示される。正規分布からの極端な逸脱は確認されなかったため, これらの変数をそのまま用いて分析が行われた。

分析においては17項目すべての相関行列を用いて探索的因子分析(最尤法・プロマックス回転)が行われた。その結果3因子(「体制化方略」「反復方略」「イメージ化方略」)を仮定するモデルが, 堀野・市川(1997)の結果からも, また解釈容易性からも, 最も妥当と判断された。ただし単純な構造から遠かったため, 共通性が低いものから観測変数を順次削除し, 2項目「11. その単語を使っている熟語を覚える」「12. 発音が何か他の別の言葉(日本語)に似ていたら語呂合わせをする」を削除した段階の15観測変数モデルを妥当と判断し, 最尤法による検証的因子分析の結果から, このモデルはデータを十分に説明していると判断できた(CFI= 987, RMSEA= 069)。

またC-test結果の全体の得点分布はほぼ正規分布とみなせるもの(平均29.41, 標準偏差9.50, 歪度-0.32, 尖度0.03)であり, 同じ問題を用いて多段抽出法によって38校1,584人からデータを得た前田(2002b)の結果(平均28.27, 標準偏差9.97, 歪度0.13, 尖度-0.43)と大きく異なることから, このデータは日本の高校生英語学習者の全体像をかなり反映するものであると考えられる。

TABLE 1 各選択肢に対する回答の割合 (N=1,177)

項目	1	2	3	4	5	6	7	n	平均	標準偏差	歪度	尖度				
01	16	9	12	7	16	0	20	0	16.9	9.9	7.6	1,175	3.52	1.61	0.02	-0.79
02	9	8	8	6	11	9	12	3	22.9	14.6	20.0	1,177	3.17	1.55	0.26	-0.63
03	16	6	12	7	21	3	20	2	18.8	7.2	3.3	1,167	3.46	1.64	0.09	-0.82
04	15	1	14	4	21	4	16	4	19.8	7.4	5.4	1,175	3.55	1.71	0.16	-0.85
05	15	2	12	9	18	9	23	8	18.7	7.5	3.0	1,176	3.34	1.61	0.20	-0.66
06	10	5	10	4	13	6	15	7	26.6	13.5	9.8	1,175	3.73	1.66	-0.06	-0.75
07	18	9	16	2	22	6	22	5	13.0	4.8	2.0	1,176	2.73	1.42	0.43	-0.39
08	10	5	8	2	13	4	19	8	23.2	13.9	11.1	1,175	3.95	1.90	-0.02	-1.08
09	13	7	10	3	17	9	24	2	19.8	9.5	4.6	1,170	4.54	1.92	-0.39	-0.95
10	15	1	12	1	14	0	17	8	18.4	13.5	9.1	1,177	4.44	1.89	-0.39	-0.90
11	12	7	10	4	18	6	21	9	21.4	10.0	5.0	1,175	3.79	1.66	-0.07	-0.77
12	16	3	11	7	12	4	16	6	17.4	12.9	12.7	1,175	3.97	1.97	-0.06	-1.17
13	14	5	11	3	16	1	16	5	17.9	12.3	11.5	1,176	3.89	1.88	-0.05	-1.09
14	27	0	18	4	22	1	23	5	6.1	1.7	1.2	1,177	4.42	1.95	-0.35	-1.05
15	11	1	7	8	11	6	13	6	23.6	16.1	16.2	1,176	4.23	1.77	-0.26	-0.79
16	17	6	13	9	21	5	23	5	14.5	5.8	3.2	1,175	3.67	1.83	0.09	-0.98
17	11	9	8	7	11	6	14	4	17.8	18.7	17.0	1,176	4.17	1.78	-0.26	-0.88

学習成果別のVLS使用傾向

被調査者全体を対象として要約するだけでなく, 多くの被調査者における学習成果のばらつきを踏まえ, 学習成果別の検討を行った。すなわち, C-testの結果を基に, 被調査者全体は上位(36点以上:平均から0.50標準偏差以上)・中位(35点以下から25点以上:平均から0.50標準偏差以内)・下位(24点以下:平均から0.50標準偏差以下)の3グループに分割された(TABLE 2)。

構造方程式モデリング<概要>

これら3グループについて, 配置不変および, 因子パターンと観測変数の切片を等値として測定不変を仮定したうえで, 構造方程式モデリングを用いた多母集団の同時分析が行われた(TABLE 3)。その結果, AICにおいて改善が確認され, 因子間相関と, 因子の平均と分散とが比較可能であるモデル1を解釈した。

このモデルによる解はFIGURE 1に示される。なお, 全体を分析対象とした結果は因子の平均を0, 分散を1として推定しているために, 図には挙げていない。また, 矢印にかぶせてある数値はその標準化した相関係数を, 因子の右上または右下に付してある数値は因子の平均と分散(非標準化係数)を示す。なお, 中位グループの因子の平均は0, 分散は1に固定している。

構造方程式モデリング<因子間相関>

相関に関して, 全体としては, 体制化方略, 反復方略, イメージ化方略の3因子間の相関はある程度確認される。ただし, 学習成果によって分割したグループ間には, 因子間相関に明らかな傾向の違いが存在した。

グループごとに相関の強さを比較した場合には, 体制化方略と反復方略との相関についてはほぼ変化が見られない。しかしその他においては違いが顕著である。

TABLE 2 C-test 結果

グループ	平均	標準偏差
全体(N=1,177)	29.41	9.50
上位(n=385)	39.54	4.13
中位(n=432)	29.76	2.89
下位(n=360)	18.15	5.47

TABLE 3 多母集団の同時分析における適合度指標の比較

	χ^2	df	CFI	RMSEA	AIC
モデル0:配置不変+測定不変	979.929	309	884	0.43	1171.929
モデル1:モデル0+誤差分散が等値	1039.827	339	879	0.42	1171.827
モデル2:モデル0+因子平均が等値	1019.896	315	878	0.44	1199.896
モデル3:モデル0+因子分散が等値	1001.099	315	881	0.43	1181.099
モデル4:モデル1+モデル2	1079.828	345	873	0.43	1199.828
モデル5:モデル1+モデル3	1058.042	345	876	0.42	1178.042
モデル6:モデル2+モデル3	1045.318	321	874	0.44	1213.318
モデル7:モデル1+モデル2+モデル3	1101.943	351	870	0.43	1209.943

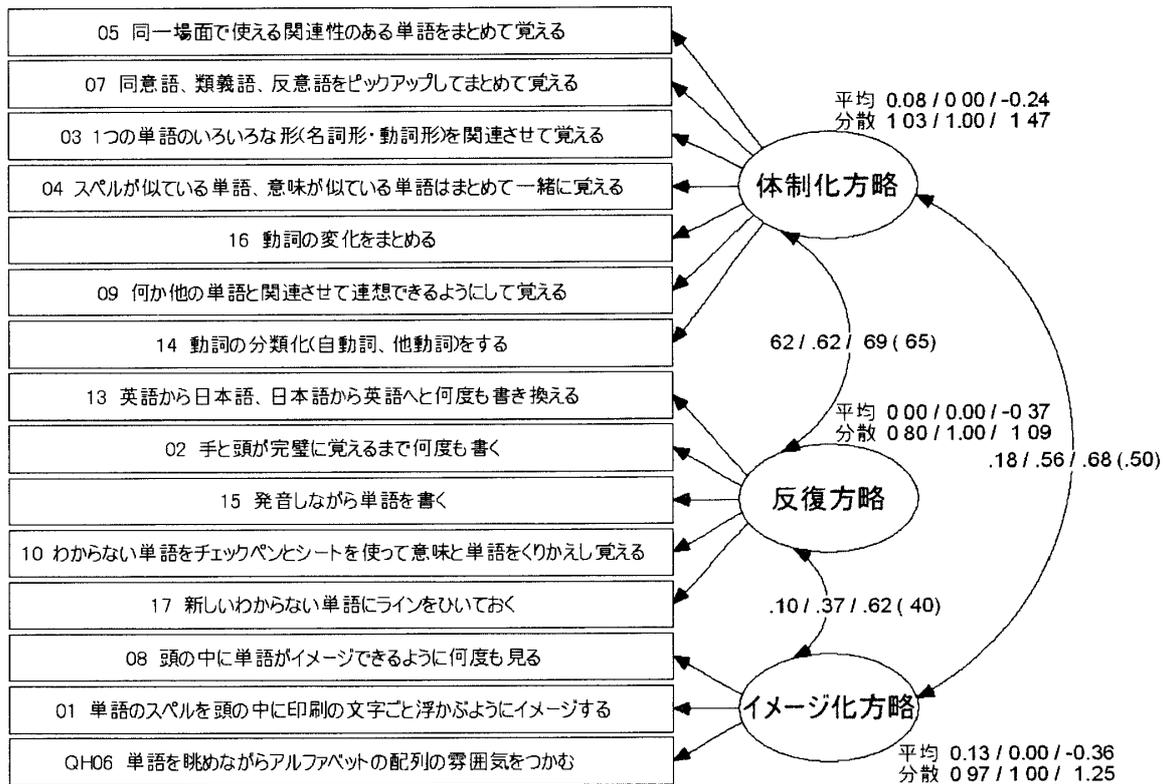


FIGURE 1 構造方程式モデリングの結果 (上位/中位/下位, 括弧内は全体)

反復方略とイメージ化方略の相関は、上位 (.10)、中位 (.37) そして下位 (.62) と学習成果が低くなるにつれて、その相関が次第に強くなっている。また、体制化方略とイメージ化方略の相関は上位 (.18) から中位 (.56)、下位 (.68) と、同様に相関が強くなっている。

構造方程式モデリング<因子の平均と分散>

3つの方略因子のうち2つについて、上位と中位の因子平均を比較した場合にはほとんど差がないか、上位の方がわずかに上という程度であった。一方、下位は体制化方略で-0.24、反復方略で-0.37、イメージ化方略で-0.36であり、上位と中位に比べてVLS使用が低いという結果が得られた。また、分散については、下位のばらつきが比較的大きいことが明らかになった。

質問紙の簡略化

また、目的3)に従って教室場面でのVLS使用測定を考慮し、表面的妥当性と実施容易性の観点から質問紙の簡略化が試みられた。第3因子である「イメージ化方略」に含まれる質問項目が3項目であることから、他の2因子の項目も同様に因子負荷の高いものから順に3項目に限定し、体制化方略には質問項目03, 05, 07のみ、反復方略に02, 13, 15のみとして同様の分析を行った。その結果としてモデルの適合度指標 (CFI=

.945, RMSEA=.032)は悪化せず、TABLE 4に示される因子間の相関(標準化係数)や、因子の平均と分散(非標準化係数)も大きく変化しなかった。

項目数を9つに限定した場合には指標数が減ることによって測定の信頼性が損なわれるものの、この3因子モデルに沿った学習者のVLS使用の測定が、かなりの程度で可能であると考えられる。

考 察

様々な高等学校の協力を得て多数の回答を得たことと、学習成果の指標として用いたC-test得点が多段抽出法を経たデータにも近かったことにより、今回得られた結果はかなりの程度で日本の高校生英語学習者の一般的傾向を示すものであると考えられる。すなわち目的1)は果たされ、目的2)の一部も満たされた。

TABLE 4 簡略化された9質問項目による分析結果 (上位/中位/下位)

	相 関			因子の平均	因子の分散
	体制化方略	反復方略	イメージ化方略		
体制化方略	-	44/ 53/ 56	15/ 53/ 65	0.07/0.00/-0.26	1.07/1.00/1.33
反復方略	44/ 53/ 56	-	07/ 31/ 60	0.02/0.00/-0.34	1.00/1.00/1.21
イメージ化方略	15/ 53/ 65	07/ 31/ 60	-	0.13/0.00/-0.36	0.97/1.00/1.25

目的2)については、一般的な高校生英語学習者を学習成果でとらえたときの中間層と、平均が中間層より1標準偏差程度異なる上位または下位の集団として分析を行い、修めた学習成果が異なる学習者によって、因子平均の違いからVLS使用の強さが異なることと、因子間相関の違いからVLS同士の関連の強さが違うことが確認され、成果を得た。

分析結果から、下位の高校生と中位の高校生は、主としてVLS使用の全般的な強さによって区別され、中位である学習成果が高い高校生の方が、VLS使用が全般的に強い。先行研究で主張されているとおり、VLS使用と学習成果との間には正の共変関係が確認される。

そして中位の高校生と上位の高校生ではVLS使用の強さにあまり変化はないものの、イメージ化方略と他の2方略が独立して使用されている点で区分できる。イメージ化方略は単語を見ることによって頭の中でイメージできるようにする方略である。学習成果が高い高校生ほど、他の2つのVLSの使用とは無関係にこの方略を用いている。

すなわち、高い学習成果を修めている高校生はイメージ化方略と他の2つの方略とについて、前者を好むものと後者を好むものとに分かれている。そして、それぞれ好む方略は学習成果の低い高校生よりも強く使用するが、好まないものはその逆である。その結果として、学習成果が高くなるにつれて前者と後者は無相関に近づく一方、上位と中位では前者も後者もVLS使用の強さ自体に変化がないと解釈できる。この、体制化方略および反復方略、またはイメージ化方略の、どちらを好んだりどちらに適したりしているかという課題については、適性処遇交互作用の観点などから、今後さらなる検討の余地がある。

目的3)にとっては、高校生によるVLS使用の測定結果が、かなり一般的な回答傾向として示されたことも有用である。さらに教室場面における測定も考慮して9質問項目(3方略にそれぞれ3項目ずつ)に精選したものについてもモデルとデータの適合が吟味され、簡便な測定方法として使用可能となった。

そして実際の指導を考えた場合には、上述の3グループ別の分析から得られた結果を基に、平均的な学習成果の高校生(中位)より学習成果が低い高校生(下位)には、VLSを提示したり実際に使わせて有効感を得させたりし、使用するVLSのレパトリーを増やしたり使用を促進したりすることが望まれる。平均的な学習成果の高校生(中位)には、さらに学習成果が高

い高校生(上位)には体制化方略と反復方略を好むものとイメージ化方略を好むものがあると思われるため、どちらにも応じた指導が効果的であろう。ただし前者と後者を分ける要因については、本研究の限界を超える。しかし、これらの点に留意することで、高校生の英語語彙学習をさらに促進できると思われる。このことが、本研究における目的4)の成果である。

本研究では横断的な調査結果に基づき、学習成果において平均的またはそれよりも上位または下位として3グループに分けた高校生のVLS使用とVLS使用間の相関について分析などを行った。特に上位のVLS使用の適正や好みに影響を与える要因について、研究の余地が残される。同様に、学習成果の段階によってVLS使用傾向が変わるという解釈を行ったが、縦断的研究によって実際にそのような発達段階をたどるのかどうかを検証することも今後必要であろう。

引用文献

- 姉崎達夫 1999 学習方法が中学生のEFL語彙の学習に及ぼす影響 上越教育大学大学院学校教育研究科言語系コース(英語)研究論集, 14, 19-34.
- 姉崎達夫 2000 語彙学習方法の効果:文脈学習・機械的学習・キーワード法の比較 高梨庸雄・卯城祐司(編) 英語リーディング事典 研究社出版 Pp.158-178
- Cohen, A. D. 1990 *Language learning*. Boston: Heinle & Heinle Publishers.
- de Groot, A. M. B., & Keijzer, R. 2000 What is hard to learn is easy to forget: The role of word concreteness, cognate status, and word frequency in foreign-language vocabulary learning and forgetting. *Language Learning*, 50, 1-56.
- Gu, Y., & Johnson, R. K. 1996 Vocabulary learning strategies and language learning outcomes. *Language Learning*, 46, 643-679.
- 堀野 緑・市川伸一 1997 高校生の英語学習における学習動機と学習方略 教育心理学研究, 45, 140-147. (Horino, M., & Ichikawa, S. 1997 Learning motives and strategies in high-school students' English learning. *Japanese Journal of Educational Psychology*, 45, 140-147.)
- 北條礼子 1997 日本人EFL学習者の英語学習方略に関する研究(2) 上越教育大学研究紀要, 16, 583-596.
- 狩野 裕・三浦麻子 2002 AMOS, EQS, CALISに

- よるグラフィカル多変量解析(増補版) 現代数学社
- Kojic-Sabo, I., & Lightbown, P. M. 1999 Students' approach to vocabulary learning and their relationship to success. *Modern Language Journal*, **83**, 176-192.
- 久保信子 1999 大学生の英語学習における動機づけモデルの検討 教育心理学研究, **47**, 511-520.
(Kubo, N. 1999 Orientation-appraisal model for Japanese university students' learning English: Relation among learning motive, cognitive appraisal, learning behavior, and performance. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **47**, 511-520.)
- Lawson, M. J., & Hogben, D. 1996 The vocabulary-learning strategies of foreign-language students. *Language Learning*, **46**, 101-135.
- 前田啓朗 2000 構成概念の妥当性の検証—日本の英語教育学研究における傾向と展望— *Japan Language Testing Association (JLTA) Journal*, **3**, 119-126.
- 前田啓朗・大和知史 2000 構造方程式モデリングによる高校生の言語学習方略使用と言語学習達成の分析—SILLで得られたデータのより適切な分析と結果の提示方法の提案— *Language Laboratory*, **37**, 143-162. (Maeda, H., & Yamato, K. 2000 Learner strategy use and learning achievement: An analysis by structural equation modelling. *Language Laboratory*, **37**, 143-162.)
- 前田啓朗 2001 日本の高校生英語学習者による英語学習方略使用—学習方略測定のための基礎研究— *Japan Language Testing Association (JLTA) Journal*, **4**, 95-106.
- 前田啓朗 2002a 日本の高校生英語学習者によるノート・テーキング方略使用 *Japan Association for Language Teachers (JALT) Journal*, **24**, 70-82. (Maeda, H. 2002a Japanese high school EFL learners' note-taking strategies. *Japan Association for Language Teachers (JALT) Journal*, **24**, 70-82.)
- 前田啓朗 2002b 高校生英語学習者の学習方略使用と学習達成 *STEP Bulletin*, **14**, 26-38.
- 三浦宏昭 2002 より効果的な語彙学習方略に関する研究—入門期の学習者に焦点を当てて— *Annual Review of English Language Education in Japan (ARELE)*, **13**, 131-140. (Miura, H. 2002 A study on effective vocabulary learning strategies for beginners. *Annual Review of English Language Education in Japan (ARELE)*, **13**, 131-140.)
- Nation, I. S. P. 1990 *Teaching and learning vocabulary*. NY: Newbury House.
- Oxford, R. L. 1990 *Language learning strategies: What every teacher should know*. NY: Newbury House.
- Rodriguez, M., & Sadoski, M. 2000 Effect of rote, context, keyword and context/keyword methods on retention of vocabulary in EFL classrooms. *Language Learning*, **50**, 385-412.
- Sanaoui, R. 1995 Adult learners' approaches to learning vocabulary in second languages. *Modern Language Journal*, **79**, 15-28.
- Schmitt, N. 1997 Vocabulary learning strategies. In N. Schmitt & M. McCarthy (Eds.), *Vocabulary: Description, acquisition and pedagogy*. Cambridge: Cambridge University Press. Pp. 199-227.
- Schmitt, N. 2000 *Vocabulary in language teaching*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 豊田秀樹 1998 共分散構造分析<入門編> 朝倉書店
- 山森光陽 2002 中学生用英語学習目的尺度の開発: 縦断研究を可能とするために 早稲田大学教育学研究科紀要別冊, **10**, 111-118.

謝 辞

本研究を行うにあたっては、広島大学英語教育学会会員である高等学校の先生方による多大なご助力なくしては調査が成立し得ず、ご協力くださった先生方、被調査者となった学習者の皆様には心よりの感謝を申し上げます。また、研究全体を通じて惜しみないご支援とご助言を下された広島大学大学院教育学研究科英語文化教育学講座の三浦省五先生に、深謝致します。

付 記

本研究の一部は、第27回全国英語教育学会広島研究大会において口頭発表された。本稿はそれをもとに、分析等の拡充をしたものである。

(2002.7.18 受稿, '03.5.10 受理)

Vocabulary Learning Strategy Use and Learning Achievement by Japanese High School EFL learners

*HIROAKI MAEDA (INFORMATION MEDIA CENTER, HIROSHIMA UNIVERSITY), KENJI TAGASHIRA (HIROSHIMA MINAMI HIGH SCHOOL)
HIROAKI MIURA (OITA UENOGAOKA HIGH SCHOOL) JAPANESE JOURNAL OF EDUCATIONAL PSYCHOLOGY, 2003, 51, 273-280*

The present study aims to investigate relationships between the use of Vocabulary Learning Strategies (VLS) and learning achievement by Japanese EFL (English as a Foreign Language) high school students. Approximately 1,200 students from 15 high schools participated in the survey, which consisted of a questionnaire to ask their VLS use and a C-test to estimate their general learning achievement. The subjects were divided into three (high/mid/low-proficiency) groups by means of a test score. Confirmatory Factor Analysis supported three latent variables : organization, repetition, and image strategies, as preceding research states. It was also found that EFL proficiency correlated with the use of strategies : mid- and high-proficiency learners were more likely to use strategies than were low-proficiency students. Also it was found that the mid- and low-proficiency learners use the three strategy types in roughly constant proportions, but high-proficiency learners do not use image strategy in the same proportion as the other two strategies are used. Finally, a detailed description, implications for teaching, and question items are described for the development of vocabulary instruction in the classroom.

Key Words : Vocabulary Learning Strategy (VLS), high school EFL learners, learning achievement